



## 感情が爆発したときの安全確保

子どもの中には、第9号の「怒りの温度計」の例に示したレベル1から瞬時にレベル5に到達し、大興奮、大暴れとなって、周囲の物や掲示物を破損したり、特定の他者への暴力行為に及んだりする、いわゆる「キレやすい子」がいます。

“キレる”に至る経緯には、2パターンあるようです。

- 友だち（特に相性が悪い子）にからかわれるなど、癪に障ることを言われたときなどに、その出来事とは不釣り合いな感情の爆発が起こる場合。目つきが豹変し、相手を執拗に追いかけては手加減せず徹底的に攻撃します。
- その子の許容範囲を超えた不快な出来事（急な予定変更、新規場面への遭遇、していたいことを遮られる、したくないことをさせられる、嫌な音が聞こえるなど）や、過去の不快な体験がフラッシュバックして、不安感や恐怖心、嫌悪感、怒りの感情を抑えられなくなり、爆発的な行動に走る場合（※）。 ※ 他に、石のように固まる、人目を気にせず泣く、自分の体を痛みつけるなどの行動が見られる場合もあります。



教師や周囲の子たちには何が起こったのか理解できないうちに、怒号や奇声とともに暴れたり突進したりすることもあり、不意に突き飛ばされたり、投げたものが当たったりしてけがをする恐れもあります。

「これは危険だ」と判断したら、**当該児と周囲の子の安全確保と、当該児を暴力の加害者にしないために体を押さえなければなりません。**

例えば、教師が両腕で子どもの上半身を後ろから抱え、自分の両手を子どもの胸の前で固く組むなどして、飛び出して行くのを防ぎます。「ごめんね。危ないから押さえるよ。」などと穏やかに声をかけるとともに、子どもに痛い思いをさせない配慮が必要です。

この体勢では、子どもの後頭部で教師が顔面を殴打されないよう注意します。たとえ小学校低学年でも、渾身の力で暴れたときには教師一人では押さえきれません。後で保護者に説明した際に疑問をもたれないためにも、**できる限り2名以上での対応**が望まれます。

クールダウンは、問題が起こった場所以外の、刺激の少ない部屋でさせる方が早く落ち着きます。大声や人目対策にはスタジオが向いています（物品の整理が必要）。教師が力を緩めた途端にすり抜けて、怒りの矛先に向かっていく恐れがあれば、教師は出入り口を背にポジションを取ります。落ち着くまでには、小一時間要することも多いものです。なお、担任は別室での対応よりも、教室対応（授業）を基本的に優先させることを共通理解しておきます。

こうした対応が力による指導と誤解されないためには、あくまで**安全確保と加害者・被害者を生まないための教育的対応であって叱責や罰を与えるものではないこと**や、指導に際しては**感情に走らず、穏やかに、かつ毅然と行うこと**の共通理解が欠かせません。

保護者対応は「困った迷惑行為」として苦情を訴えるために行うのではなく、起こった事実を伝え、学校の対応への理解と協力を得るとともに、**当該児を最もよく知る保護者から対応のヒントを得る**ために行います。

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）  
TEL 639-4392